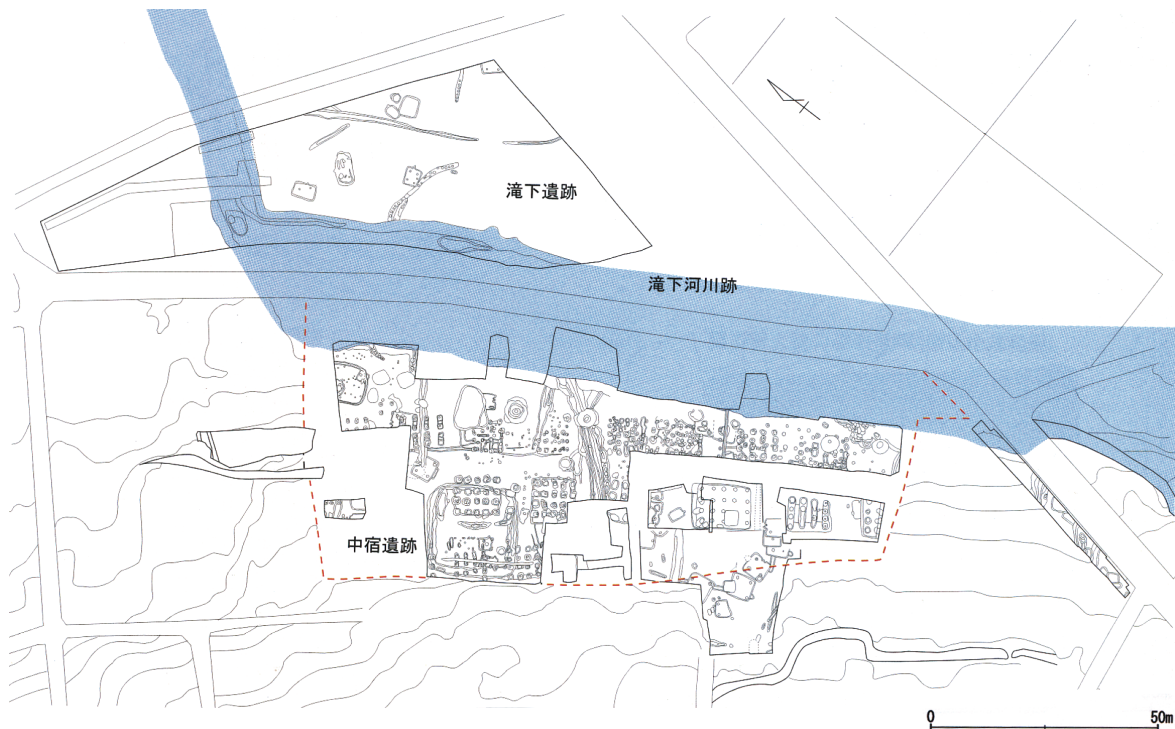


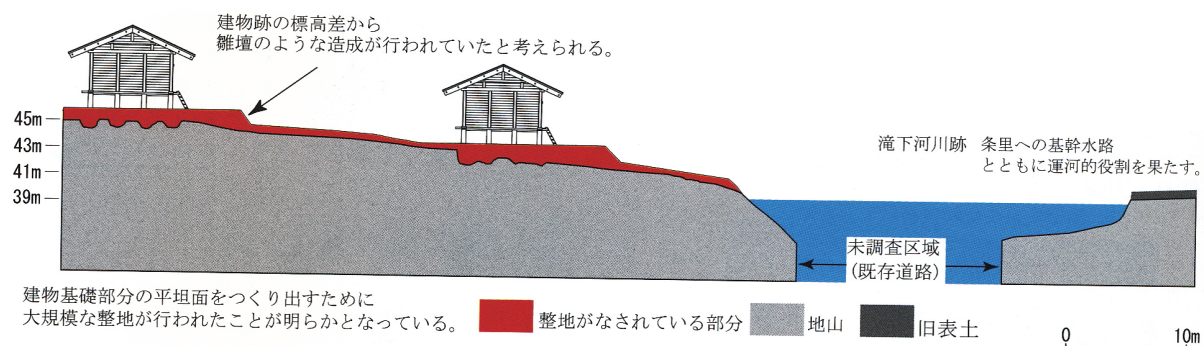
1. 中宿遺跡の発掘調査

中宿遺跡は、旧岡部町の北部、櫛挽台地北端に位置し、眼下には広大な低地帯が広がっています。平成3～10年にかけて5回の発掘調査が行われ、台地縁辺に整然と列をなした状態で大型倉庫群が発見されました。これら大型が次々と発見は、埼玉県内ではじめてのことであり、埼玉県の古代の歴史を語る上で欠かすことのできない重要な遺跡として、平成3年12月に埼玉県の史跡に指定されました。倉庫群は、7世紀末（1,300年前）～10世紀（1,000年前）頃に建てられた、古代榛沢郡家の正倉院跡と考えられます。

中宿遺跡で発見された倉庫群跡は、ほとんどが総柱式の建物で、第2列の建物群には大型のものが集中していました。これらの総柱式建物は、8世紀後半（1,200～1,250年前）頃に礎石建物に建替えられます。倉庫群の東西は大溝によって区画されており、北側には滝下河川跡が確認されています。



◀中宿遺跡全体図



◀倉庫と河川

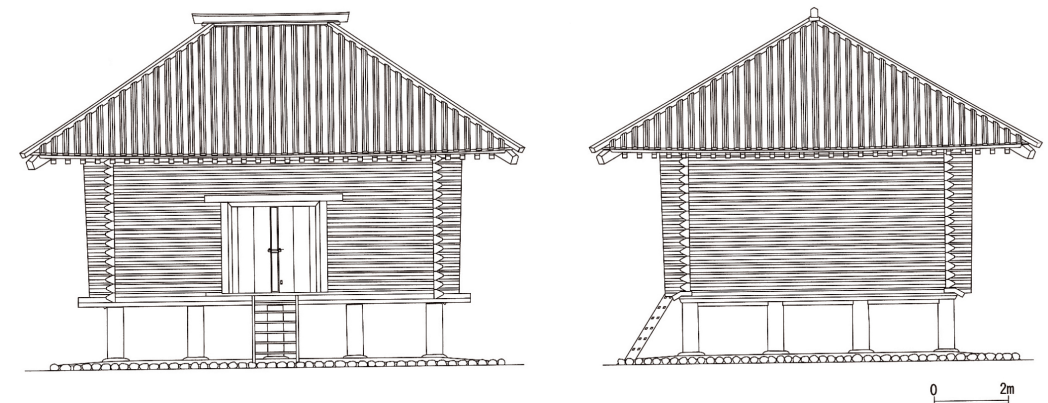
2. 古代倉庫について

平成6～7年、発掘調査で確認された第1号建物跡、第2号建物跡の広さや柱穴の大きさを参考として、2棟の古代倉庫が復元されました。

第1号建物跡は校倉（あぜくら）、第2号建物跡は板倉（いたくら）と呼称される工法となっています。校倉は、断面六角形の材木（校木）を交互に組み合わせて壁を造ります。板倉は、柱と柱の間に厚板を落とし込み、壁を造るものです。両方とも日本で古くから使われてきた建築技法です。

中宿遺跡の時代には、律令制度（りつりょうせいど）があり、中宿遺跡は榛沢郡（はんざわぐん）の郡家（ぐんけ）と考えられ、古代倉庫群には税として納められた稲が保管されていました。

第1号建物跡復元図(校倉)▶



第2号建物跡復元図(板倉)▶

